２０２５／１２／１４　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：約束を守られる主③：『エッサイの根』
聖書箇所：イザヤ書１１章１－１０節

この朝いっしょに考えたいみことばは、イザヤ書１１：１－１０です。まず初めに、一つクイズを出しますので、少し考えてみてください。この時期になると歌われるクリスマスの賛美歌、有名なものであれば町中でも普通に流れていますが、次に挙げる曲の中で、イエス様の誕生を歌っていない、本来はクリスマスの曲ではないものはどれでしょうか？１番「天には栄え」、２番「諸人こぞりて」、３番「神の御子は今宵しも」、４番「きよしこの夜」。全部そうだと思っている人もいるかもしれません。正解は、２番の「諸人こぞりて」でした。日本語の歌詞ではなかなか読み取れないかもしれませんが、この曲の作詞家アイザック・ワットは、もともと飼葉おけに寝かされた救い主よりも再び来られる王として、イエス様を賛美する目的でこの歌を書いたとされています。実際にもとの歌詞を見てみれば、その意図ははっきりと現れていました。３番の歌詞にもこのように記されています。「もはや罪と悲しみが広がることはなく いばらが地をおおい尽くすことはない 主は来られてその祝福をあふれさせ のろいの及んだすべての地にそれを満たされる」と。言うまでもなくこの歌詞はまだ実現していません。罪や悲しみは今も変わらずに存在しています。しかし、それらはいつの日か来られる主によって取り除かれると言うのです。有名なこのクリスマスの賛美は、一度目よりも二度目のイエス様の到来に焦点を置いていたものでした。それではこの歌をクリスマスに歌うのは間違っているのでしょうか？いいえ、そうではありません、むしろこの曲は大切な真理を私たちに教えてくれます。それは一番目があるから二番目があるということです。クリスマスは過去に成し遂げられた恵みを振り返る時だけではありません。今から約２０００年前、約束のとおりに救い主が来られたこと、それは将来必ず約束のとおりに王が帰って来られることを確信し、今喜ぶことができる理由を私たちに与えてくれるのです。

〇『エッサイの根』：約束の王に関する四つの描写

きょう私たちが見ようとしている箇所も再び帰って来られる王の到来を約束しています。その王に関して特に私たちは四つの描写を見て取ることができます。いったいどのようなお方が帰って来ようとしているのか、いっしょに見てみましょう。

イザヤ１１：１－１０

「:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。:2 その上に、【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と【主】を恐れる霊である。:3 この方は【主】を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、:4 正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。:5 正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる。:6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。:7 雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。:9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。【主】を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。:10 その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。」

１．約束の王が持つ特徴１－２節

さっそく一つ目の描写からいっしょに考えてみましょう。一つ目は約束の王が持つ特徴です。やって来られる王様は、王としての特別な特徴を備えられたお方でした。１－２節にそのことが記されていま

す。「**:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。:2 その上に、【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と【主】を恐れる霊である。**」と書いていました。

●二つの特徴：

１）王は救いをもたらす第二のダビデ１節

さて、私たちはここに大きく二つ、約束の王が持っている特徴を見て取ることができます。一つ目にこの王は、救いをもたらす第二のダビデでした。１節を最初に読んだ時、なぜ急に木の根株や新芽の話が出てきたのだろうと思いませんでしたか？これを理解する上でも鍵になるのはいつもと同じで文脈です。改めて思い出してみてください。預言者イザヤが用いられていた時代には、もともと一つだったイスラエルは北と南の二つに分裂していました。残念ながら二つの国はどちらも神様を捨てて、ひたすらに罪を愛する堕落した状態にありました。だからこそ、神様は彼らの上にきびしいさばきを下そうとされました。強大な敵に国を攻めさせて、強制的に民を奴隷として連れ去らせようとするのです。そして、実際に北王国イスラエルを滅ぼすのに使われたのがアッシリヤという国でした。今見ている１１章の直前となる１０：５－６に「**:5 ああ。アッシリヤ、わたしの怒りの杖。彼らの手にあるわたしの憤りのむち。:6 わたしはこれを神を敬わない国に送り、わたしの激しい怒りの民を襲えと、これに命じ、物を分捕らせ、獲物を奪わせ、ちまたの泥のように、これを踏みにじらせる。**」と書かれていました。。このようにしてイスラエルは、自分たちのかたくなさと罪のゆえに怒る神様のさばきを受けることになりました。美しい木々にもたとえられるイスラエルは、さばきによって踏みにじられ、切り倒され、そしてそこに残るのはただ切り株だけになるのです。

しかし、さばきはこれで終わりではありません。神様はご自分がそのように用いたアッシリヤの上にもさばきをもたらされました。高慢になっていた彼らの上にも御怒りを注がれるのです。１１章の直前１０：３３－３４を見るとこのように書かれています。「**:33 見よ。万軍の【主】、主が恐ろしい勢いで枝を切り払う。たけの高いものは切り落とされ、そびえたものは低くされる。:34 主は林の茂みを斧で切り落とし、レバノンは力強い方によって倒される。**」と。アッシリヤのことです。ですからイスラエルの民だけではありません。プライドにあふれて高ぶっていたアッシリヤも御怒りの斧によって、切り倒されることになりました。生い茂る木々は切り倒され、そこには切り株だけが残されるのです。少し想像してみてください。あたり一面に広がっている切り株の山、緑はどこにも見当たりません。見渡すかぎり真っ茶色です。いのちの香りなど全くしない、希望も見いだせない絶望的な文脈の中にあって、一つの根株から新芽が生えると言うのです。神の民に救い、助けをもたらす新しい王様が生まれると言うのです。

ここで注目してほしいのは、新芽が生える場所です。「**エッサイの根株から**」でした。エッサイとはダビデの父親でした。つまり人々に希望や救いをもたらす王様は、ダビデの父エッサイを通してやって来ると預言者イザヤは言うのです。これを聞いても、今の私たちにはピンとこないかもしれませんが、これは実に不思議な表現でした。歴史を振り返って見る時、イスラエルで王様になっていく者たちは、よくかつての偉大な王様、ダビデと比べられていました。たとえば、列王記や歴代史を読んでいてこのような表現に出くわしたことはありませんか？Ⅱ列王記１８：３に「**彼はすべて父祖ダビデが行ったとおりに、【主】の目にかなうことを行った。**」とか、その逆にⅡ列王記１６：２に「**……彼は父祖ダビデとは違って、彼の神、主の目にかなうことを行わ**なかった」と。「**父祖ダビデ**」ということばがいろいろなところで出てくるのです。イスラエルのこれまでの王様は、このような形で父ダビデや父祖ダビデと比較され、そして彼に結びつけられていました。

しかし、ここで登場する新しい王様は違っていました。ダビデではありません、ダビデの父親であるエッサイに結びつけられていたのです。単なる偶然でしょうか？いいえ、ここに大事な意味が含まれていました。それはやって来られる王様は、第二のダビデだということです。エッサイの血筋から生まれる約束の王様は、最初のダビデとは異なるもうひとりのダビデだということです。確かにダビデは歴史

上でも最高の王様のひとりでした。神様の心にかなうことを求めて、勇敢で戦いのたびに勝利を収め、国を一つにまとめていました。まさに比較されるにふさわしいような王様でした。しかし、彼も完璧だったわけではありません。姦淫や殺人といった罪を犯し、多くのあやまちを繰り返した罪人のひとりでした。最初のダビデは、人々にどのような時も救いや希望をもたらすことはできない罪人の不完全な王様だったのです。しかし、次に生まれる第二のダビデは違いました。エッサイの根株から生まれる新しい王様は、前のダビデよりもはるかに偉大なお方だと言うのです。この方はだれが見ても絶望的な切り株だらけの状況の中にあって、人が必要とする救いをもたらすことのできる完全な王様でした。神の民は、このようなお方にあって常に希望を見いだすことができたのです。それが一つ目の特徴でした。

２）王は主の御霊を持っておられるお方２節

またもう一つの特徴は、この王様は主の御霊を持っておられるお方でした。２節に「**その上に、【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と【主】を恐れる霊である。**」と書いています。ここで「**【主】の霊**」と言われていたのは私たちもよく知っている聖霊なる神様のことです。そして、そのような「**霊がとどま**」っているというのは、新しい王様が持っている特別さをさらに強調するものでした。これはどういうことでしょう。聖霊は、新約の時代だけではなく旧約の時代も人々の間で働いていました。その一つの働きは、特定の人の上に注がれて、その人物が神様から託された働き、特別な仕事をなすための力を与えることでした。たとえば、出エジプト記の中に登場するベツァルエルは、主から指示されたとおりに幕屋を作るために御霊に満たされていました。出エジプト記３１：２－５にこのように書かれています。「**:2「見よ。わたしは、ユダ部族のフルの子であるウリの子ベツァルエルを名ざして召し、:3 彼に知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たした。:4 それは、彼が、金や銀や青銅の細工を巧みに設計し、:5 はめ込みの宝石を彫り、木を彫刻し、あらゆる仕事をするためである。**」と。この人物は、神様から託された特定の仕事をするために御霊に満たされていました。ほかにも挙げることはできます。たとえばギデオンやサムエル、サウルやダビデも同じです。聖霊なる神様は旧約の時代にも働いていて、特定の人々が託された務めを果たすために必要な力や知恵を与えていたのです。ただし、その働きは一時的なものでした。旧約における「**【主】の霊**」、聖霊なる神様の働きというのは、その人物が特定の務めをなしてしまえば、そこから離れていく限定的なものだったのです。

それを踏まえて考えてください。２節で何と言われていましたか？やって来られる新しい王様の上には「**【主】の霊がとどま**」っていると言うのです。一定期間を経ても、そこから去ることはありません。その内に「**【主】の霊**」がいつまでも居続けているのです。しかも、ここで王様の内に働く「**【主】の霊**」は、単なる霊として描かれていませんでした。ここでは具体的に六つのものが二つずつセットになって出てきていました。初めに出てきていたのは「**知恵と悟りの霊**」でした。この二つのことばは聖書の中でもよく組み合わされて用いられ、民を導く指導者に求められる物事を正しく理解し、判断する力を表しました。同じことばはイエス様を除いて、この世で最も知恵のあった王様ソロモンが、「**聞き分ける心をください**」と神様に願った場面でも使われていました。Ｉ列王記３：１２で、そのように願ったソロモンに対して、神様はこのように答えています。「**今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。……**」と、同じことばです。要するに、やって来る新しい王様は、どのような場面でも物事を適切に理解し、判断して評価することができるお方だということです。

また次に「**はかりごとと能力の霊**」とありました。この二つのことばは、前者がさまざまな計画を立てる力、後者がその立てた計画を実行することのできる力を表していました。要するに、やって来る王様は、計画を立てても途中で頓挫してしまうような力のないお方ではありません。ご自分が計画を立てれば、その計画を必ず成し遂げることができるお方です。そして、最後に「**主を知る知識と【主】を恐れる霊**」とありました。この二つのことばは、この人物が持っている神様との親密な関係を表していました。「**主を知る知識**」は、ただ単に知識として神様を知っているだけではなく、個人的に主を知っていると

いうこと、そして同時にこの方は「**【主】を恐れる霊**」、正しい恐れを神様に持っているがゆえに、神様に従順に従おうとするお方でした。それが新しい王様の姿だったのです。

知恵と悟りに富んでいて、立てた計画をすべてなすことができ、どのような時も父なる神のみこころを求めて、それに従い主を恐れる思いを持って歩む王、いったいこのような偉大な特徴を持った王様の姿を私たちはだれのうちに見いだすことができるでしょうか？私たちはこのような姿の一部分を、一度目にクリスマスに来られたイエス・キリストのうちにも見て取ることができます。ダビデの子として生まれた救い主こそ知恵に満ちたことばを話されたことは言うまでもありません。みわざには力があふれていて、だれに対しても正しい判断を常に下し、どのような時も父なる神様を愛して敬い、そしてそのみこころに従順に、最後まで従われたお方でした。

２．約束の王がもたらす統治　３－５節

しかし、一度目以上に私たちはこの姿をさらに見るようになります。再びイエス様が支配者としてこの地上に帰って来られる時、この方がもたらされる統治のうちに、私たちはそれを目の当たりにすることになるのです。それが二つ目に見て取れる描写です。二つ目は約束の王がもたらす統治です。

●新しい王の統治

１）常に公正な統治

やって来られる新しい王様が地上のすべてを統治される姿が、３－５節に描かれていました。まず３－４節の初めまでこのように記されています。「**:3 この方は【主】を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、:4 正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し……**」と。新しい王の統治は、一つに常に公正な統治でした。この方が支配されるもとにあっては、いっさいの不公平さや不平等は存在しないのです。このようなことばが言われていました。「**その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず**」と。少し考えてみてください。私たちのまわりには、まさに逆のことが今もあふれ返っています。最近でもニュースでありました。最初から「私は事件とは関係ない」と無実を訴えてきた袴田巌さんが約半世紀にわたって死刑囚として収容された後、冤罪だったと判明しました。目で見る不確かな証拠や耳で聞く不確かな証言に頼った裁判官たちは、結果、誤った不当な判決を下してしまったのです。

また、私たちの日常の中でも同じです。あちらこちらで不公平さは見て取れます。たとえば、職場で懸命に仕事をしたとしても、正しく評価されないこともあるでしょう。陰でした努力は報われずに、逆に普段手を抜いている者が表だった成果を上げれば、まわりから認められるかもしれません。また、友人や知り合いとの関係においてもそうです。自分の内側で抱えている思いや考えを勝手に決めつけられて、ありもしないことで疑われ、冷たく扱われることもあるかもしれません。私たち自身も含め、すべての人は自分の目で見るところや自分の耳で聞くところでしか判断を下すことができないからこそ、そこには常に不公平さや不平等さが伴うのです。

しかし、この新しい王様は違いました。再び帰って来られる主イエスは、目の見るところによってさばかず、耳の聞くところによって判決を下すことはなさいません。イエスはすべてをご存じの方でした。人の外側だけでなく、内側のすべてをご覧になることのできる全知の方です。そして、それゆえに常に公正な統治をなされるのです。今の時代だったら簡単に忘れ去られてしまうような立場の弱い者や貧しい者もあわれみのうちに扱われるようになります。えこひいきも不正ももうありません。不当な苦しみもそこにはありません。この方の公正な支配のもとにあって、私たちは変わらない安心と平安を見だすことができるようになるのです。ただし、これはすべてのものが例外なく、安心を見いだすという話ではありません。４節の続きからこのように書かれていました。「**:4……口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。:5 正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる。**」と。

２）常に正義を伴う統治

新しい王の統治は常に公正なだけではありません。同時に常に正義を伴う統治でした。この方の支配のもとでは、これまで見過ごされてきた悪も含めて、神様に逆らっていた罪人はすべて滅ぼされると言うのです。すべての悪にふさわしい正義が下るのです。しかし、いったいどのようにしてでしょうか？数多くの軍隊をもってでしょうか、さまざまな力強い武器によってでしょうか、いいえそうではありません。今読んだ箇所で「**口のむち**」、「**くちびるの息**」ということばが繰り返されていました。言い換えれば、イエス様がもたらされる義のさばき、滅びというのは、主ご自身のことばによってもたらされるということです。どれほど力強いお方かということです。新しい王が敵やすべての悪を滅ぼすのに必要とするのは、屈強な軍隊でも、最強の武器でもありません。この世界を造り、保っておられる、ご自分のことばだけでした。ただ「悪が滅びよ」と言ったら、そのことばだけで十分でした。

そして、このことばにあって、私たちはどのような時も希望を見いだすことができます。私たちが生きている今の世界では、確かにさまざまな悪があふれています。テレビやネットを見てみれば、毎日のように心を痛めるニュースが流れてきます。怒りや憎しみに駆られた人が各地で争いを引き起こし、理不尽に振るわれた暴力によって、目を覆いたくなるような事件が数えきれないぐらい起こっています。明らかに正しくない、絶対におかしいと思う不正や不公平さ自体がまかり通っています。キリストを信じる信仰のゆえに難しさや不当な扱いを受けることもあります。この世の中で、私たちがなぜ、どうしてと問いたくなる、私たちに怒りや悲しみを覚えさせる苦しみがまわりにあふれているのです。しかし、そのような時にこそ、私たちは、今の世界は一時的なものでしかないことを覚えることです。今の痛みの時はいつか必ず過ぎ去ります。そして、過ぎ去ったそこにやがてすべてを統治する王がやって来るのです。その日が来れば、悪はすべてさばかれます。神様に逆らう罪人は永遠に滅ぼされます。しかし、イエス様を信じ受け入れ救われた者たちはみな、公正と正義を帯びた王が築く王国にあって、いつまでも喜び楽しむことができるのです。

３．約束の王が築く王国　６－９節

公正と正義に帯びた王様は王国を築きます。どのような王国を築くのだろうと疑問に思うかもしれませんが、みことばはその様子を続けて教えてくれました。それが三つ目に見て取れる描写です。三つ目は、約束の王が築く王国です。やって来られる新しい王様が統治されている王国のすばらしい様子が６－９節に記されていました。「**:6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。:7 雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。:9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。【主】を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。**」と。私たちの頭では想像できない不思議な、とてつもない光景が、ここに描かれていました。いっしょの場所にいたら大変なことになる動物たちがいっしょにいました。狼がか弱い羊と獰猛なひょうが子やぎと若くて血の気の多いライオンが子牛や肥えた家畜とともに過ごしていたのです。また、ただいっしょにいるだけではありません、その動物たちがいっしょに食事さえしていました。熊と雌牛はいっしょに草を食べ、ライオンがわらを食べていました。そして、その子どもたちはいっしょに伏していました。

ここで「**伏**」すと訳されていることばには、「安心して休む」、「身を横にする」という意味が含まれています。つまり、彼らは何の恐れや不安を感じることなく、食事をともにし、寝床までともにしていたと言うのです。それだけではなく、いっしょの場所にいたら大変なことになるようなものたちが喜んで、いっしょに楽しみさえしていました。まだ母親の乳を必要とする小さな赤ん坊が、猛毒のコブラが住む穴の上で戯れていたのです。ここで「**戯れ**」と訳されていることばには、「大喜びする」とか「楽しむ」といった意味が含まれていました。今そんなことをしたら、次の日のニュースで最悪の親として報道されることになるでしょう。しかし、この場面では、親はおらず、赤ん坊がただひとり蛇に手を伸ば

して、蛇と自由に遊んでいました。そこにはいっさいの危険や恐れも存在していなかったのです。６節から読むと、あまりにも不思議な光景が広がっていたので、ある人はこんなの到底信じられないと思ったかもしれません。しかし、思い出してみてください、本来なら、これこそがもともとの姿でした。神様が最初にこの世界を造った時、そこには完全な平和がありました。危険や争いはどこにもありません、すべての動物たちも神様とともに穏やかに暮らしていました。

しかし、そのような完全な平和はアダムが罪を犯したことによって壊れたのです。創世紀３：１７節で神様はこのように人に言われています。「**また、人に仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。**」と。ひとりの人アダムによって、この世界に罪が入りました。この罪の影響は全人類にまで及ぶことになりました。しかも全人類だけの話ではなく、この罪は同時にすべての被造物をも呪うことになりました。ですから嵐や地震などの災害が起こるようになりました。鳥や魚、動物たちは互いの間で争うようになり、衰えや痛み、病や死が絶えず存在するようになりました。最初からそうだったのではありません。最初、完璧で美しかったありとあらゆるものは、罪のゆえに汚れ果てました。悲しいことに、すべてのものが苦しみと呪いの下に置かれるようになったのです。それが罪のもたらした結果でした。

しかし、感謝なことがあります。それはこの悲惨な状態が終わりではないということです。みことばは、新しい王様がやって来る時、地上に完全な平和をもたらし、一度は壊された自然界さえも本来の美しい姿に戻る日がやって来るのだと約束していました。私たちの頭では到底信じられないかもしれませんが、狼が羊とともに過ごし、牛と熊がともに草を食べ、赤ん坊が蛇とともに大喜びする平和に満ちた王国が、いつの日か築かれるということです。そして、その日は偉大な救い主、王であるイエス様によってもたらされるのです。これが約束の王の築かれるすばらしい王国でした。そして、そのような喜びの未来が先に待っているのであれば、私たちにできることがあります。希望を失わずに、その日を熱心に待ち続けていることです。今の歩みにはそれぞれに難しさがあります。罪の結果、からだの痛みもあります。病も人との争いもありますし、罪との戦いなど私たちをがっかりさせるような出来事は数多くあります。しかし、それらはいつの日か終わりを迎えます。苦しみから完全に解放される時が必ず来るのであれば、約束の王と永遠をともに過ごす日を楽しみにしながら、その王のことを心から愛し、罪から離れ、聖さに忠実に歩み続けていくことです。かつて、ペテロもこのようなことばを残していました。Ⅱペテロ３：１３－１４のところにこのように彼は述べています。「**:13……私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。:14 そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。**」と。

４．約束の王が与える希望　１０節

さて、ここまで約束の王が持っている特徴やもたらされる統治、そして築かれる王国を順番に見てきました。どれをとっても驚くべきものだと思います。しかし、まだ終わりではありません。最後にもう一つだけすばらしい事実が描かれていました。四つ目に見て取れる描写は約束の王が与える希望です。やって来られる新しい王様は、民が必要としている希望を与えることのできるお方でした。みことばに戻ってください、１０節にこのように記されています。「**その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。**」と。何が言われていたのでしょうか？理解する上で、二つの部分に特に注目してみてください。

▸**「エッサイの根」**

一つ目に「**エッサイの根**」と言われていました。１節に戻って見ると、１節では「**エッサイの根株から**」と言われていました。新しい王は「**エッサイの根株**」、エッサイの血筋から約束どおりに与えられる存在だと言われていたのです。しかし、ここでは新しい王は同時に「**エッサイの根**」でもあると言われていたの

です。「**エッサイの根株**」から生まれてくる存在は、同時にエッサイにとっての根でもありました。ことばを言い換えれば、エッサイ自身もその根から生まれたということです。約束のイエス様は、エッサイから生まれて、エッサイはイエス様から生まれました。頭が混乱しますか？いったいどういうことでしょう。ポイントは明白です。人としてエッサイの血筋から来られたイエス様は、すべての創造主である神様だということです。エッサイを造ったまことの神様が、約束の血筋、エッサイの血筋を通して王としてこの世に来られたのです。そして、そのようなお方が「**エッサイの根は、国々の民の旗として立ち**」と書いていました。創造主である神、人として、「**エッサイの根**」を通して来られたお方は「**国々の民の旗として立つ**」と言われていたのです。

▸「旗」

二つ目に注目してほしいのは「**旗**」です。単なる「**旗**」ではありません。長い棒の先につけられている「**旗**」です。昔のお侍さんも持っていました。その当時、長い棒の先に「**旗**」がついているような旗印は丘の上などに立てられました。何のためかと言うと、兵士を集める合図として使われました。丘の上に自分の「**旗**」が立っていたら、遠くからでも兵士たちはそれを見て、目立つその旗を目指して集合したのです。そして、実際にイザヤ書の中でも、神様がイスラエルをさばくための兵士を集める目的として「**旗**」を揚げていました。イザヤ５：２５の最初にこのように書かれています。「**このゆえに、【主】の怒りが、その民に向かって燃え、これに御手を伸ばして打った。……**」と。イスラエルに対するさばきの様子が書いていました。２６節にも「**主が遠く離れた国に旗を揚げ、地の果てから来るように合図されると、見よ、それは急いで、すみやかに来る。**」と述べられています。「**旗**」はさばきをもたらすために用いられました。しかし、１１章では新しい王様自身が、ご自分の民を集める「**旗**」として立つというのです。何のためでしょうか？さばきではなく希望を与えるためでした。王であるイエス様は、ご自分を心から求めて集まってくるすべての者に、永遠に続く本当のいこいや安らぎを与えてくださるのです。

立ち止まってよく考えてみてください。イエス様は一度目に約束の救い主としてこの地上に来ました。この地上に来たイエス様は約３３年過ごし、そして救いのみわざを成し遂げた後、勝利者として天に戻られました。その滞在は一時的なものだったのです。しかし、次にこの方が約束の王として再び地上に帰って来られる時、どこかに行かれることはありません。ご自分が築く栄光に輝く王国に永遠に住まわれます。そして、すばらしいことは、同じ場所で、イエス様を救い主として信じる私たちもみな永遠に過ごすようになるということです。最高の王であるイエス様のもとに集められた私たちは慰めを受けます。終わらない平安と賛美にあふれるようになります。今はまだ一度も見たことのない、愛するイエス様をこの目で実際に見るだけではありません。アダムとエバが罪を犯す以前に味わっていた同じ祝福、主とともに語り、交わることができる喜びを私たちも味わうようになります。かつて、呪われて失われてしまったものはすべてもとどおりに回復するのです。いったいだれによってでしょうか？やって来られる新しい王様、イエス・キリストによってでした。

だからこそ、私たちはクリスマスを心から祝うのです。インマヌエル、ひとりのみどりごとして、約束どおりに一度目にお生まれになったお方は、約束どおりに再びこの地上に帰って来られます。そうであれば、このすばらしい事実を前にして、あなたは今どのように応答するでしょうか？やって来られる偉大な王様をあなたは今、自分の王様として個人的に知っているでしょうか？この方の前に今ひざまずき、へりくだって、自分の主人として認めて信じ受け入れているでしょうか？もしまだ認めようとせず逆らって歩んでいるのであれば、どうかその罪を悔い改めて、この方を自分の救い主と信じてください。帰って来られる前に、自分の救いを真剣に考えてください。クリスマスは私たちに大切な約束のメッセージを教えてくれます。一度目に救い主として来られ、罪と死に勝利されたイエス様は、二度目にすべてを統治する王として帰って来られるのです。ただ恵みによって、イエス・キリストを信じる信仰によって救わ

れ、神の民とされた私たちはこの日を楽しみに待っていることができます。この日を感謝して、心待ちにしながら私たちは賛美することができます。

「諸人こぞりて迎えまつれ　久しく待ちにし主は来ませり　主は来ませり　主は　主は来ませり」と。